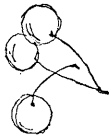
幼児のためのよみもの(その2)

幼児と絵本



本田和子

「幼児にとって、絵本も、つみ木やままごと道具と同じように、すべて『遊ぶためのもの』と考えています」

幼稚園での絵本の扱いについて質問されたある保育者が、こう答えました。この答えは、幼児と絵本に関するさまざまな見解を刺激し、論議させる性格をもっているようです。

「絵本はおもちゃではない」

当然、こう主張する人が出てきます。「保育者が絵本を玩具視するから、子どもたちが絵本をつみ木遊びの屋根に使ったり、ままごとのお盆代りにしたりするのだ」こんな非難が後に続くことも少なくありません。

「絵本はおもちゃではなく、『子どもがはじめて出会う本』なのだ」こういって、この人たちはよい絵本を慎重に選び、本を大切にする本好きの子どもを育てようとするでしょう。比較的高価な、良質の絵本で、保育室の書架を埋めようとするかもしれません。

ところで、一方では次のような声があります。

「絵本だって、子どもが自由に扱うべきもので、活動の媒介物という点では他のおもちゃと変わらない。絵本をあまり特別視して、読書指導に神経質になったり、扱い方をうるさく制限したりすることは好ましくない」

この見解は、また、実にさまざまな附属物が伴ないがちです。「幼稚園の絵本は消耗品と考えてよいのではないか。だからあまり高価なものは必要がない。大切に読ませ、長くとっておきたい高価な本は、家庭の蔵書にしたらよい」こんな意見が続いてくることもあるでしょう。「いろいろなおもちゃが必要なように、いろいろな絵本が必要なのだ。良書、良書とおとながあまりむきになって高度のものばかり揃えるのは、ある意味で問題だ」こんな言葉がつぶやかれることもあります。そして、保育室の書棚に

は、中くらいの価格のいろいろな絵本が、比較的雑多に集められている、ということが多いようです。

さて、幼児にとって、絵本は一体、何なのでしょうか。

一種のおもちゃと考えてよいでしょうか、おもちゃであるとすれば、それはどんな性格のおもちゃなのでしょうか。

あるいは、絵本をおもちゃ視するのは、非常に弊害の多いことなのでしょうか。

ここでは、焦点を先ずこの辺に合わせて、幼児と絵本のかかわり合いを、みていくことに致しましょう。

◆絵本はおもちゃでしょうか

児童文学者の瀬田貞二さんは、「絵本はおもちゃではない」と断言します。「おもちゃはおもちゃ、本は本。子どもにはあくまでも、絵本をすばらしい本の中の最初の本として与えてやりたい」というのです。

児童文学の研究家中川正文さんは、赤ちゃん時代の本は、おもちゃの一種とみなされる面が強いけれど、親や教師にとっては「本」として扱う自覚が大切だと説きます。「本は読むもの」という姿勢が早くから必要だというのです。そして、二、三歳になれば、もう絵本はおもちゃから独立していなければならない、絵本は「本当はおもちゃではないのだから」というわけです。

この辺で、子どもの方に目を向けてみましょう。

二歳になったS子、一冊の絵本をひろげて機嫌よく遊んでいます。「いないいないばあ、いないいないばあ」両手で顔をかくしては、「ばあっ」絵本は、まつたにみよこさんの「いないいないばあ」でした。しばらく一人で遊んでいたS子はそばにいる母親に気づきました。「ママ、いないいない」母親にも一しょに「いないいないばあ」をしてほしいとの要求です。親子は、絵本を一頁めくっては「今度は狐さんがいないいないばあ」「今度はねずみさんがいないいないばあ」と遊びはじめました。

四歳半のK、お気に入りの絵本を開いて一人でぶつぶつ言っています。絵本はバージニア・バートンの「はたらきもののじょせつしゃけいてぃー」です。「じぇおぽりすの街は道路がぐるぐるしているから、市役所へ行って病院を通って水道局」などとつぶやきながら指で絵の上をたどっていきます。大好きな除雪車の「けいてぃー」が街中を走りまわっているところでしょうか。「まちは雪で埋まりました」という頁があります。真白な雪野原で何も描いてない頁です。「この下に何がかくれてるんだろうなあ。ここが市役所かしら、この辺は消防署かしら。雪がチラチラ

チラチラあとからあとから降ってきたんだ」そんなことを言いながら、真白な頁の上に指で建物をかたどり、「みんなかくれちゃった」とその上を手でなでまわす動作です。「ああ真白になっちゃった」

この子どもたちは、絵本で遊んでいます。本当に楽しんで、絵本の語りかける世界に引き込まれています。「本は読むもの」といわれますけれど、この子どもたちにとってはこれが「読んでいる」ことなのではないでしょうか。

児童図書の研究家でもあり、作家でもある渡辺茂男さんは、こう言っています。「子どもにとって、本をみるということは、おとなの考える読書ではない。絵本をみる、読んでもらう、お話を聞く、これらはすべてたのしい遊びなのだ。子どもの生活の中に絵本があれば、つみ木をしたり、自動車で遊んだり、砂遊びをしたりするのと同じように、絵本をみるということも自然に生活の一部になってしまうのだ。心の中でねじりはち巻きをしてから読書にかかるおとなとは、全く違う楽しい本の世界が展開していくのだ」

子どもにとって、絵本は、「読む」という楽しい遊びを誘い出してくれる材料なのです。そしてその「読み方」に、発達による相違や、個人差やらがあって、当然、おとなと子どもにもちがいがある、ということではないでしょうか。

遊びを誘い出し、遊びを展開させる材料は、広い意味ですべて「おもちゃ」といってよいでしょう。人工的に遊具として生産されたものもあれば、自然のままのもの、あるいは生活用品、子どもの環境にあるものは、すべておもちゃになり得るのです。こんな意味からいえば、絵本だって、おもちゃの一種、子どもの遊び（見る・聞く・読む・考える・想像するなどの活動）の媒介物といえましょう。

「絵本はおもちゃではない」と否定し、「絵本は本である」と威儀を正すことは、こう考えてくると、あまり意味がないようです。ただし、「絵本だっておもちゃだ。だから自由に遊ばせればよくって、その扱い方などあまりやかましく制限すべきではない」というようなことになってくると、それは間違っています。「絵本は消耗品だ」という考え方にも、問題があるようです。

おもちゃには、それぞれの機能を最もよく発揮させる扱い方があるはずです。同時に、してはならない用い方もあるはずです。例えば、つみ木。これは、積み上げたり、並べたり、物を構成したり、あるいはこわしたり、いろいろな遊び方があります。時には、床の上や砂場などを自動車になって走りまわったり、ままごとの家のブロック塀になることもあるでしょう。かなり多角的に

遊べる材料ですけれど、つみ木を雪合戦のたまの代りにして投げ合ったり、のこぎりで引いて細かくし、ままごとのキャラメルにする、などということは、許されないでしょう。

人形をボールの代りに蹴りっこする、こんなことも、当然、禁じられるでしょう。

絵本だって同じではないでしょうか。絵本は運動遊具でもありませんし、構成活動にも適していません。絵本は、「みる・聞く」などの受容活動や、「読む・想像する」という活動にふさわしい遊具なのですから、あまり不適当な用い方は制限すべきだと思われます。絵本は破るものでもなければ、折りまげるものでもない、色を塗ったり書き込んだりする自由画帖でもないのです。まして、投げたり、ふみつけたり、物を乗せて床の上をすべらせたりするものではない、という指導は、絵本がおもちゃであっても重要なことでしょう。

「幼稚園の絵本は消耗品だからあまり高いものはどうも」というのも、考えてみるとおかしなことです。確かにおおぜいの子どもがみるのですから、家庭の本よりも痛むでしょうし、いつかはこわれてしまうかもしれません。ただ、そういう意味では、人形だってままごと道具だってみんな消耗品といえそうです。

ままごと道具を買う時は、保育用品メーカーからカタログをとりよせたりして、三千円も四千円もするよいものを選ぼうとし、決して近所の玩具屋に売っているブリキやプラスチックの安物を買わない保育者が、「絵本は安いものでよい」とするのは、やはり偏見ということになりましょう。高価なものが必ずしもよいとは限りませんし、現在の絵本が高すぎるのは確かに問題なのですが、「どうせおもちゃだから、消耗品だから、安いので間に合わせよう」というところに問題を感じさせられます。

瀬田さんや中川さんが、「絵本はおもちゃではない」と力説したのも、こんな弊害を憂えてのことだったようです。おもちゃだということで扱いがでたらめになったり、選択がイージーになったりしてはならないでしょう。

「絵本という遊びの材料」がそなえている機能を十分に発揮させることのできるような、よい選択、よい扱いを、私共はいつも考えていかねばならないのです。

◆絵本のはたらき

ここで、「絵本という遊びの材料」は、どういうはたらきをする材料なのか、ということを考えてみましょう。絵本の機能としては、一般に次のようなことが言われています。

①具体的に経験した事物を、絵の中で再認する。これは、事物そのものがないのに、そのものを見たのと同じ反応を起こすわけで、抽象化の第一歩である。

②絵本の絵を手がかりに、現実の認識が深まり、知識が整理される。つまり現実には三毛猫しか見たことのない子どもが、絵本の黒猫を「ニャアニャア」と認めるというのは、猫の特性を発見し、それに認識を深めていることになる。

③具体的経験の代理作用が行なわれる。実際には、まだ象を見たことのない子どもが、絵によって象を知るようになる。

④イメージの展開が刺激され、助長される。これは想像力を伸ばす働きももっている。

⑤絵画的表現の美しさ、色彩や形の美しさを楽しむ。

⑥描かれている絵を言語的に把握し、表現し、それについて語り合うことなどを通して、言語生活が豊かになる。

⑦文字に対する興味が育つこともある。

絵本のはたらきを、科学的に分析してみればこんなことにもなりましょうか。

そして、子どもにとっては、何よりも「楽しませてくれるもの」としての機能を発揮するのですし、おとなに読んでもらうことによって、「おとなと子どもを結びつけるもの」としてのはたらきをもしているのです。そして、おとなの側からは、「子どもを楽しませながらある価値を伝える」というはたらきを、絵本は果たしてくれていることになります。

さて、「絵本という材料」の機能が以上のようであれば、当然、それにふさわしい子どもの活動は、「一人で静かに読む」とか、「おとなに読んでもらって静かにみる」ということにならないでしょうか。時には、「数名の友だちと一しょにみる」「おとなに読んでもらって数名の友だちと一しょにみる」という場合もあってよいでしょう。

絵本の指導に熱心な幼稚園の中には、一冊の絵本を保育者が級全員に読んで聞かせて、全員で話し合うといった扱いを多くしているところがあります。たまには、共通の経験をするのもよいかもしれませんが、絵本というものの本来の機能からいうと、ちょっと無理なように思われます。それに大きさや形態からいっても、集団で鑑賞するには不適当な材料でしょう。

「自分で、読みたい絵本を出してきて、ゆっくりと絵本の世界に入り込む」そんな活動が許されるような場所と時間の確保こそ、絵本の指導にとって、最も大切なのではないでしょうか。

◆子どもの周囲にそろえておきたい絵本

児童心理学を研究する人たちは、絵本についておおよその発達段階を示してくれます。つまり、一〜二歳児には、絵本は「再認・知識の整理」といったはたらきをするもの、したがって乗物絵本・動物絵本などのような「ものの本」がふさわしい。想像力が芽生えかける三歳くらいから昔話絵本や童謡絵本、想像力がますますゆたかになる四、五歳には本格的な物語絵本、同時に外界への関心を助長する意味で観察絵本・知識の本を用意しよう、というわけです。

しかし、先に例にあげたS子は、一歳半くらいから「ものの本」にはほとんど興味を示しませんでした。「桃太郎」などは、一歳八ヵ月頃の愛読書だったようです。「ももちゃん」と呼んでくり返しくり返し楽しんでいました。桃太郎誕生の場面など、「じいたんオヤ！　ばあたんマア！　あかちゃんオギャア」と、画面の人物を指さしながらつぶやくのに、周囲のおとなたちはいつも微笑させられたそうです。

S子に限らず、早い時期から物語的なものに興味を示す子どもは、少なくないようです。もちろん、全体としてのストーリーが把握できるはずはありませんから、一頁毎の画面の中から、自分に訴えてくるものを探しているのですが、「ものの本」にはみられない動きのある画面が、子どもの心をひきつけるように思われます。

現在のわが国には、「ものの本」でよいものがないという指摘がよくなされます。瀬田貞二さんなどは、一歳〜二歳の間はむしろ「ものの本」など与えず、実際の乗物玩具や人形を与えた方がよい、と主張しています。主題ばかり大きく書いてら列した「ものの本」は、子どもが最初に出会う本としてはあまりにも感動に乏しい、というのです。

確かに、「赤ちゃん時代は筋のないもの」という考え方は、少し公式的にすぎるようです。単純な物語が、はっきりした美しい絵と短いひびきのよいことばで語られているものを、早くから子どものまわりに用意しておくことは必要でしょう。ブルーナの「うさこちゃん」シリーズなど、そのよい例と思われます。

同時に、この時期の子どもたちが、目に触れた絵の中から自分の知っているものを発見する時の喜びをも大切にしてやりたいと思います。一歳七ヵ月の子どもを本屋へ連れていったところ、モーターマガジンの「世界の自動車特集号」をかかえ込んではなさなかった。「これもジドウシャ、これもジドウシャ」と感激の声を上げた、ということを、ある母親が報告しています。

三歳をすぎて、お話を聞きたがり、本格的な絵本の世界に入っていけるようになった子どものためには、実に豊富なさまざまな

絵本が出版されています。昔話・創作物語・科学的なもの、あるいは詩の本など。

絵も、白黒、色彩の豊かなもの、はり絵、写真、童画のもの、写真的なもの、様式画など、極めて多彩です。

幼児絵本の条件として、あるていど単純化された絵で明かるい調和のよい色彩、色数はあまり多くないこと、などあげる人もありますが、子どもたちの反応を注意深くみるなら、こんな条件では律し切れない場面を、しばしば発見させられます。例えば、色のついていない白黒の絵本でも「いたずらきかんしゃちゅうちゅう」のように、子どもたちの愛読書になるものがたくさんあるのです。

ところで、白黒の絵本を与えたら、せっせと色をぬってしまった、と訴えた母親がありました。ぬりえと間違えたのか、未完成だと思ったのか、とにかくその子どもにしてみれば、早く色をぬり上げてきれいにしようと思ったのでしょう。それまでに持っていた絵本のタイプとか、与える時期などは、やはり考慮しなければならないようです。

絵のスタイルにしても、さまざまなものが受け入れられます。結局は、色彩や絵のスタイル、手法、あるいは主題などにはいろいろなものがあっていいし、できるだけいろいろなものを子どもの周囲に用意しておきたい、ということになりそうです。

ただし、いろいろな絵本が必要だということは、どんなものでもよい、ということにはなりません。いろいろなタイプの絵本の中から、「よいもの」を選んで、という意味です。

私は、「絵本が絵本であるためには、絵と文とが同じ比重をもたねばならない」というリリアン・スミスの主張を先ず重視したいと思います。絵がストーリーを物語り、ストーリーが絵画として目に見えてくる、絵があることによってその主題がはるかに生き生きと語られているような本、それが先ず「よい絵本」の第一条件ではないでしょうか。ことばがほんの絵の補助に終わっていたり、逆に絵が物語の一部分の挿絵的な意味しかもっていないものが少なくありません。

次いで、一冊の本はその本としてのテーマを持っていてほしいと思います。断片的な知識がゴタゴタとよせ集められたようなものは、子どもをひきつける力に乏しく、説得力もないでしょう。物語もあれば知識の頁もあり、工作の材料ものっている、というようなものからは、「本を愛す子ども」が育ちにくいと思います。よい物語絵本と、よい図鑑と、というように各々独自性をもったものをそろえておくことが望ましいでしょう。

絵は、その様式や手法がどうであれ、美しく個性的で語る力を

持っていることが大切です。没個性的な童画風人物、おとなも子どもも昔話の主人公も、みんな同じように丸い顔でパッチリした眼、という現象は、あまり好ましいとは思えません。前にあげたS子の愛読書「ももちゃん」も、実はこんな童画風桃太郎でした。こんなイメージが、S子が日本の昔がたりを聞く場合の基礎になっていくとすればS子に対してすまないことをしてしまった、と母親は悔いています。同じ「ももちゃん」でも、もう少し、日本の伝承童話としての雰囲気を伝え、桃太郎童話の素朴さや健康さをよく物語っているような、そんな絵本を用意してやるべきだったというのです。

文は、主題の展開に必要な最小限のことばで、簡潔に美しく構成されていてほしいものです。そして、読んで聞かせるのに適していること、日本語として正しいこと、なども必要でしょう。絵本は、絵と文が同じ比重なのですから、文章のあまり長いものは、絵本としては不適当な場合があります。名作の絵本化などには、この点で問題が多いようです。長い物語を無理して絵本にまとめるために、原作とはちがったものになっている場合があります。いろいろな出版社の名作絵本を比較したところ、五種類の「ピノキオ」が五種類とも別の物語だったり、六種類の「青い鳥」が二対四で別の物語だったりしました。

文字は、はっきりと読みやすい地色の上に、絵と上手にくみ合わせて、おかれていることが大切でしょう。絵本の文字は、強いて幼児に読ませる必要はないですが、文字に対する関心がこんなところからも育っていくことを忘れてはならないと思います。

今一つ、私は、その絵本が「子どものため」に作られているかどうかを、問題にしたいと思います。おとなの功利性やおとなの趣味に訴えるものであってはならない、本当の意味で子どもの世界の市民権を持ち得るように作られていてほしいのです。

こんな例がありました。

ある絵本に、一頁ごとにすみに「ことば」とか「しゃかい」とか、註がつけてありました。六領域に分けて、保育者が扱いよいように、という意味でしょうか。一人の子どもが不思議がりました。「この『ことば』って書いてあるの、何のこと」困ったおとなが答えました。「この頁にはお話が書いてあるでしょう。これを読むと、いろいろなことばを覚えるし、お話が上手になるからでしょう」子どもはますます不思議そうです。困惑したようにつぶやきました。「じゃ、こっちの頁のことばは、おぼえたらよくない悪いことばなんだね。でも、どうして？」

絵本は、誰のものなのでしょう。

（十文字学園短期大学）